

① 山寺の晩鐘

天保4年(1833)、水戸9代藩主徳川斉昭(烈公)が領内の景勝地を巡視し選定したもの。水戸八景選定の目的は領内の子弟に八景めぐりをすすめて、自然鑑賞と心身の鍛練とを図る文武両道の修練に資するところとさせたもの。山寺の晩鐘の碑は、稲木の西山研修所地内の東端に、高さ2.2mの大理石(寒水石)で、碑の文字は斉昭公の筆跡で「山」の字に古典文字が用いられている。

注)西山研修所は光圀が母(谷久子)の菩提を弔うために開いた久昌寺の三昧堂檀林(僧侶の学校)跡地に建てられたもの。

和歌 けふも又くれぬと告ぬ鐘の音に身のおこたりをなげくおろかさ

② 旧久昌寺跡の碑

徳川光圀公の御母堂久昌院は水戸経王寺日忠上人の化導により深く日蓮宗に帰依した。寛文元年逝去されると光圀公は厚く経王寺に葬り冥福を祈り、菩提寺とし、寺号を久昌寺と改め、寺料を寄付した。更に延宝元年この地に伽藍造営に着手し、同年五月竣成した。惣門、中門、三門、鼓楼、多宝塔、経王殿、聚石堂、方丈、食厨等を完備した上に、寺域内に摩訶延行庵をはじめ支院十坊を置くこの所に久昌寺を移し靖定山と称した。堂塔伽藍の美は明媚な風光と相まって壮観を呈した。これより先に公の江戸邸において早朝沐浴斎戒衣冠束帯で檜坂に一字三礼のまごころを傾け写経した。延宝5年7月18日はじめ、8月23日になるまではその間実に三十有余坂三十枚に法華経一部十卷83,992字にのぼるこれを厳装して大宝塔として経王殿の本尊とした……中略……

皇紀2600年

昭和15年6月10日 建立者 旧水戸藩家老三木佐太夫源之幹九代孫 三木啓次郎

協賛 日蓮宗本山久昌寺 貫主 井上日豊

同士 茨城県西山修養道場長 正六位勲六等 稲垣國三郎 謹選謹書

③ 永田円水(勘衛門)の墓所

永田円水の父茂衛門(茂平次)善重と云って甲斐の人で、兄弟三人浪々し寛永17年水戸に落ち着いたといわれる。茂衛門は非常の才があって、博学、地理風水又鉦山土木の術にも精練であった。水戸は初代徳川頼房公治政の時代茂衛門の上伸により、頼房公は金山開発を命じ、領内の鉦山採掘に尽力し町屋の山も金、銀、銅、錫を産出したという。この間、茂衛門は私服を肥やしたと投獄され、その赦免として、土木水利工事の命令をされる。茂衛門の水利事業は辰の口、岩崎、小場江の三堰だった。茂衛門は当時葉谷に移住し小場江堰完工の1年前の万治2年(1659)5月22日68歳で没している。その子の勘衛門が工事を続行し完成させた。堰以南の天水田が改良され、2割5分の増収となったという。茂衛門、勘衛門親子は藩中に48堰、88堀江を造った。市内では里の宮堰、常福寺堰、春友堰なども茂衛門勘衛門父子によるものである。また、山の寺の水道として周囲に湧き出る地下水を水源として集め、地下水道をもって水を引き久昌寺や三昧堂檀林に給水させるなどその治水事業の功績により、光圀公より勘衛門は「円水」の号を与えられた。永田円水は元禄6年(1693)5月5日75歳にて没しここに眠る。

④⑤ 山寺水道跡 山寺の水道跡(久昌寺水道) 昭和32年(1957)県指定史跡

寛文8年(1668年)徳川光圀公が元久昌寺用水のために、永田茂衛門・勘衛門父子に命じ構築させたものである。全長は約2,000mで相当部分が暗渠であり、工事にどの位の年月と経費が掛かったかは不明である。水源は稲木地区内清水平及び天神林地区内上宿平と永瀬平の3ヶ所で合流点(集水渠)は現在の天神林町2679番地で1本の導水路にまとめ、北流して、稲木町宇山ノ神地区内で2本に分岐し、1本は稲木町宇黒ヶ入の谷間を掛樋で横断し、再び尾根中腹にトンネル(長さ約80m)を掘り、元久昌寺を見下す位置でトンネルは終わり、ここからさらに約50mの先の井戸に銅樋をもって注がれたと伝えられている。また分岐した一方の導水路は、その先80mほどで開口しているが、ここからは岩樋で宮ヶ作集落内の二つの井戸に注がれた。現在でも当時の姿を残し、簡易水道として利用している。

山寺の水道の構造

1. 合流点から開口部分まで、すべて凝灰岩質泥岩をくり抜いた地下水道によって導水。

2. トンネル式の水路は

①地表下約2mで、断層の規模は高さ160cm・幅130cm前後。

②天井はやや丸く、不整形なかまぼこ型。

③底部は幅が約1m位で、中央に幅30cm・深さ30cmの溝があり、これが水路になっている。

⑥ 白馬寺 寺名：経来山白馬寺 宗派：曹洞宗 本尊：釈迦如来

後漢の明帝が仏典を白馬に乗せて西域からきた二人の僧のために中国河南省洛陽に建立した中国最古の寺院。三国時代以後、白馬寺は仏教初伝の寺として重んじられ、同名の寺が全国各地に建てられたこの寺の起源は、源如庵和尚が正平10年(1355)那珂郡山方町(現常陸大宮市山方町)に太平山常楽寺と称する寺を山方對島守(佐竹氏の家臣)の菩提寺として創建したことに始まるとされている。当時は真言宗の寺院であったらしい。その後天分2年(1531)群馬の永源寺の幻室伊達禅師により佐竹18代の義昭を中興開山として曹洞宗に改め、寺名も白馬院常安寺に改められた。白馬寺の過去帳には中興開基常安源真大禅定門佐竹右京大夫義昭公、天文21年6月3日と記載があり、戒名の位碑が遺されている。文禄3年(1594)に佐竹氏が常陸南部まで勢力を広げるに及び佐竹家臣団の大幅な入れ替えが実施され、東茨城郡の石塚城主石塚氏(佐竹氏の分家)は新治郡八郷町(現石岡市八郷町)片野城主へ、その後の石塚城主には東義久(佐竹家の御三家)を入れた。東家は、佐竹氏の分家で血縁も近く代々中務大輔を名乗り、6万石の別封をもらう佐竹氏の筆頭の家臣あり、石塚城に入ると菩提寺として山方の常安寺を白馬寺と改めて経来山白馬寺を創建した。慶長7年(1602)佐竹氏が秋田に国替えとなったとき石塚氏も秋田に移った。元禄9年(1696)徳川光圀は太田の万照寺と入れ替えに白馬寺を天神林に移した。従って白馬寺は、山方に239年、石塚に102年、天神林に移されてから約300年になる。明和6年(1769)出火により全焼したがご本尊と幡旗は消失を免れ、往古を偲ぶものとなっている。その後、4年後茅葺の本堂が再建され、更に昭和の大改造(昭和54年)により総銅葺に改修された。なお、当白馬寺の末寺は、玉造町の法眼寺、福島市の東禅寺、同東泉寺の3ヶ寺である。